

黙示録13章 「獣の国」

1A 獣の出現 1-10

1B 竜の与えた権威 1-4

2B 冒瀆 5-6

3B 聖徒たちへの戦い 7-10

2A 別の獣 11-18

1B 最初の獣の権威 11-13

2B 獣の像礼拝 14-15

3B 獣の刻印 16-18

本文

黙示録 13 章を開いてください。私たちは 12 章から、竜、悪魔のしるしを見えています。13 章は、その悪魔が一人の人物に、自分の権威、力、位を与え、神の国を取り替える、獣の国を造ります。

12 章において、竜は、イスラエルを表している女を飲み干そうとしていましたが、うまく行きませんでした。それで、次の行動を取ります。12 章 17-18 節をお読みください、「すると竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保っている者たちと戦おうとして出て行った。そして、竜は海辺の砂の上に立った。」女の子孫の残りの者、というのは、ユダヤ人で神を信じる者たちであり、また、患難の時代に、イエスを自分の主として信じて、受け入れた人々のことを指しています。彼らに戦うために出てきたということです。

1A 獣の出現 1-10

1B 竜の与えた権威 1-4

¹また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。

海辺の砂の上に立っている竜が、一頭の獣を海から呼び出しています。ダニエルの預言にこうあります。「7:2-3 私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。ると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。」海というのは、その荒れ狂うさまに、その底には陰府があり、罪が投げ込まれているという意味合いが聖書全体には、あります。ヨナが、海の底にまで大魚によって下り、陰府について語りました。預言者ミカは、「すべての罪を海の深みに投げ込んでください。」と言いました(7:19)。

そして、四頭の獣が高ぶって、獲物を食いちぎっていく姿が、ダニエル 7 章に書かれています。

これはイスラエルを踏みにじる世界帝国の姿です。バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、そしてローマです。こうした国々が立ち上がっては、倒されるのです。海が陰府や罪を示しているだけでなく、国々の荒々しい姿も「海」として描かれています。17 章にも大水が出てきますが、それが、「17:15…もろもろの民族、群衆、国民、言語です。」とあります。ですから、この海から出てきた獣は、世界の国々を征服する姿です。

そして、この獣は「十本の角」を持っています。これは、ダニエル書 7 章を読み進めると、第四の獣の特徴であることがわかります。改めて、四頭の獣が海から現れる場面を 7 章から読んでみましょう。「7:4-7 第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から身を起こされて人間のようになり、二本の足で立ち、人間の心が与えられた。5 すると見よ、熊に似た別の第二の獣が現れた。その獣は横向きに寝ていて、その口の牙の間には三本の肋骨があった。すると、それに『起き上がって、多くの肉を食らえ』との声がかかった。6 その後、見ていると、なんと、豹のような別の獣が現れた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。7 その後また夜の幻を見ていると、なんと、第四の獣が現れた。それは恐ろしくて不気味で、非常に強かった。大きな鉄の牙を持っていて、食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。これは前に現れたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。」ここです、第四の獣が十本の角を持っています。第一の獣はバビロン、第二はメディア・ペルシア、第三はギリシアですが、第四はローマであり、終わりの日に現れる復興ローマ帝国です。十の角は、その世界を支配する復興ローマが、十の王たちに支配されることを意味しています。ダニエル書 7 章には、そのことが書かれています。

けれども、この 13 章の獣は、ダニエル 7 章の第四の獣なのか？という点、若干違うようです。13 章の獣は、「七つの頭」があります。そして 2 節を見ると、この獣は第四の獣の特徴だけでなく、第一から第三の獣の特徴もあります。この獣は、終わりの時に大きく第四の獣の特徴を持っているのですが、これまでの国々の歴史や特徴も備えた存在なのだろうと考えられます。「七つの頭」については、黙示録 17 章で、御使いがヨハネに説き明かしている場面が出てきます。その時に詳しく見ていきたいですが、七つの頭は、世界を制覇しようとするような国々であると考えられます。

そして、そこで大事なのが、十本の角にある冠です。「その頭には神を冒瀆する様々な名があった」ということです。ここから、獣がどのようにキリストに取って替わろうとしているのか、そして神に対抗しているのかを見ることができます。キリストが来られる時に、主は多くの王冠をかむっていることを 19 章 12 節でみることが出来ます。キリストが全ての王の王であることを表しています。しかし、キリストに額づくのではなく、自分こそが王であり、それ以上の権威はないとするのが、ここで意味する王冠です。そして、「神を冒瀆する」名が付いています。これが、獣の特徴です。獣がこれから、神の名を罵るといふ高慢の罪を犯すところを読んでいきます。

そして、ダニエル書 7 章には、第四の獣の十本の角の間からさらに小さな角が出て来ることを教えていますが、その角に「大きなことを語る口」があることを教えていたことを思い出してください(7:8)。人間のような目があって、そして大言壮語をする口があります。これが、神に対する汚れた言葉へとなっていきます。人間を中心に見ていく目から来る、神への冒瀆です。

²私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。

先ほども説明したとおり、ここはダニエル 7 章の第四の獣だけの姿ではなく、これまでの帝国の背後に働いていた悪魔がこの獣にあって一気に、全世界を支配しようとしている試みであることが分かります。豹というのは敏捷ですから、反キリストが支配するのはギリシアのように非常に速いということです。足が熊のようでありますから、ペルシアのように広域に渡って、物量や人海戦術によって支配します。そして、バビロンのように、小さな国々を獅子のように喰らっていきます。

そして、竜がその力と王座と権威を与えているのです。ここが、非常に大事な点になります。すでに 12 章 3 節で、竜がこの獣と一体になっている姿がありました。「見よ、炎のように赤い大きな竜。それは、七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた。」とあります。悪魔は、神の選ばれたキリストに対抗するために、父なる神がキリストに行われたことを真似することで対抗します。神のなさることを真似することで、人々が真理ではなく偽りを信じるように惑わすのです。神は、キリストにご自分の力と位と権威を与えられましたが、悪魔は獣に自分の力と位と権威を与えます。

覚えているでしょうか、荒野で 40 日間断食された後、悪魔が彼にやってきて誘惑しましたが、彼はイエスを高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、「マタ 4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、9 こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」」と言いました。アダムが罪を犯したので、アダムに与えられた万物の支配が悪魔に明け渡されてしまいました。しかし、神はキリストにこれらの支配権、力、位を与えられて、キリストにあって人々が万物を支配する権利を取り戻そうとしておられます。そのために神はキリストをこの世に遣わされました。

先々週の午前礼拝のメッセージで、このことを詳しくお話しました。しかし、悪魔は誘惑をして、今、この国々の栄華を与えると言ったのです。けれども、イエスは世界をご自分のものとするために、十字架の道を歩まなければいけませんでした。その苦しみを通られて、その流される血を代価として、初めて全世界をご自分のものとし、その勝利をキリスト者に分捕り物の分け前をして、そして父なる神のものとするのです。ですから、イエスが、十字架に行かれるのをいさめたペテロに対して、「下がれ、サタン。(マタイ 16:23)」と言われたのは、そのためです。十字架を通らせな

いようにして、世を救うのがサタンの仕業です。

^{3a} その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。

七つの頭の一つが、荒らす忌まわしい者、または反キリストを示しています。17 章で詳しく学びます。彼が打ち殺されたかに思われたとありますが、14 節には、「剣の傷を受けながらも生き返った」とあります。このほとんど復活のように、致命傷から治ったのです。この既に 11 章 7 節にありました。「二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまおう。」とあります。底知れぬ所、つまり悪霊どもが幽閉され、後に悪魔自身が幽閉される所に落ちていたのですが、そこから上がって来るということです。この反キリストが致命傷を受ける姿を、ゼカリヤは次のように預言していました。「11:17 ああ。羊の群れを見捨てる、能なしの牧者。剣がその腕とその右の目を打ち、その腕はなえ、その右の目は視力が衰える。」

^{3b} 全地は驚いてその獣に従い、⁴ 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」

神がキリストを甦らせることによって、この方が全能の神の御子であることを明らかにしました。「ローマ 1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」このことの真似事をしているのです。キリストがよみがえり、昇天して神の右の座に着かれましたが、それによってこの方が主であると全ての人々が告白して、父なる神がほめたたえられるようになります。「ピリピ 2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。10 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」このことの真似事なのです。人々は獣が生き返ったと思い、獣に従います。そして、獣に権威を与えたのは竜なので、竜を拝みます。

そして、「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」と言っていますが、キリストとだれも比べることができない、キリストがついておられたら、誰が戦うことができようか、と私たちは告白するのですが、それが獣に入れ替わってしまっています。これが、福音の真理を、愛を持って受け入れなかった者たちの姿です(Ⅱテサ 2:9-12)。

2B 冒瀆 5-6

⁵ この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。

悪魔がエバを惑わしたのは、「あなたが神のようになる」というものでした。神を認めず、神を拒

み、自分が神のようになるという誘惑です。この傲慢の罪が終わりの日には最も明らかな形で現れます。ダニエル書 11 章には、反キリストがこのことを行なうことが預言されています。「11:36 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。」テサロニケ第二 2 章 4 章には、「不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」と書いてあります。これが許されるのが、「四十二か月の間」とありますが、患難時代の後半部分、三年半の間にこれを行ないます。

⁶ 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。

獣は、神を冒瀆するだけでなく、天に属している者たちも憎みます。それで、神の御名を冒瀆するのみならず、その幕屋を冒瀆します。覚えていますね、天には幕屋があります。地上の幕屋は、天にあるものの模型です。黙示録で、そこに祭壇があり、また聖所があるのを見ました。それを冒瀆するのです。それだけでなく、天に住む者たちを冒瀆します。これは、御使いのみならず、天に引き上げられた教会、患難期に殉教して、天に入れられた者たちもいます。彼らを、つまり、私たちも含めて罵ります。イエスは、ご自分のゆえに悪口を浴びせられると山上の説教で言われましたが、我々が天にいても、そうされるということです。

3B 聖徒たちへの戦い 7-10

こうして獣は、神と天にいる者たちを冒瀆します。そして 7 節以降は、神のものとされている、地上にいる聖徒たちに戦いを挑みます。

⁷ 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。また、あらゆる部族、民族、言語、国民を支配する権威が与えられた。

ダニエル書 7 章には、聖徒たちへの戦いについて預言されていました。「7:25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手になせられる。」大患難において、イスラエルの残りの者たち、またイエスを患難の間に信じて、主とした者たちに対して戦いを挑みます。

そして、「打ち勝つことが許された」とありますね。ここでの聖徒たちが、教会に対する主の約束とは違うことに気づきます。「マタ 16:18 わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」キリスト教会は、世からの迫害を受けても、多くが殉教してもなおのこと生き残り、福音は広まり、信じる者も増えていきました。けれども、大患難においては、イエス・キリストを信じたならそのまま殺される定めになっているということです。今の世において、

キリスト者も殉教するのですが、終わりの日にはその比ではなく、究極な形で現れ、地上においては望みがなくなります。

そして、「あらゆる部族、民族、言語、国民を支配する権威が与えられた」とあります。キリストの御国において、すべての民がこの方の権威と支配の中に入りますが、獣はそれをまねて、あらゆる者たちを竜の力によって行います。「ダニ 7:23 第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。」これまでも、歴史の中で世界征服をたくらんだ者たちは出てきました。近代においては、その筆頭がヒトラーでした。第三帝国と呼ばれました。そして、ヒトラーは、神の民であるユダヤ人を最終的に始末しようとしたところでも、実に反キリストのすることに似ています。けれども、彼は滅びました。同じように、反キリストは世界帝国の総統になることを試み、一時期、成功します。

⁸ 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。

獣の国が確立された時は、地に住む者たちはみな、獣を拝むようになります。けれども、例外があります。「屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されて」いる者はそうではないということです。彼らは、殺されるので、地上からいなくなりますが、けれども、彼らは獣を拝むのを拒みます。子羊のいのちの書に自分の名が書き記されていることには、それだけの力が与えられることが分かります。サルデイスの教会に対しても、勝利する者たちに対して、「またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。」との約束がありました(3:5)。午前礼拝でお話したように、名が記されているとうことは、子羊のいのちの中に私たちがいるということでもあります。

そして、ここでは、「世界の基が据えられたときから」と強調されています。「エペソ 1:4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。」大患難の時の聖徒たちは、私たちとは桁外れの、とてつもない迫害を受けます。殉教のみが選択肢となります。獣を拝むとてつもない圧力を受けます。けれども、その圧力にさえ屈することなく、死を選び取ることができるのは、自分の力ではなく、キリストのうちに自分を選んでくださった、神の主権によるのです。世の初めから永遠のいのちに定めておられる、その神の選びの力が、人々を死に至るまで忠実でいさせることができます。

⁹ 耳のある者は聞きなさい。¹⁰ 捕らわれの身になるべき者は 捕らわれ、剣で殺されるべき者は 剣で殺される。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。

ここでは、自衛行為をしてはならないという戒めです。獣が聖徒に勝利する権威は、三年半という期間のみ、神によって許されたものであるので、それに逆らっても成功しないという戒めです。こ

れはちょうど、イエスが十字架につけられるときに、ペテロに対して主が言われた言葉でもあります。「マタ 26:52 剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」世界が獣の体制の中に入ります。抵抗するためにゲリラ戦を展開しても、絶対に勝つことはできない、剣で滅んでしまいますよという警告です。かつて、アンティオコス・エピファネスがユダヤ人を迫害した時は、マカバイ家の者たちが果敢に戦ったことによって、神殿を取り戻しましたが、ここではその期間は、成功しないと戒めているのです。

そこで「**聖徒たちの忍耐と信仰が必要である**」とあります。忍耐があつて、信仰があるという対が大事です。死ぬしか選択肢がないという状況の中で、それでも、42 か月間の間だけなのだという信仰を持つことが出来ます。それゆえ忍耐できます。

2A 別の獣 11-18

こうして竜の権威による獣の国があります。この国で、獣の代弁者である偽預言者が現れます。

1B 最初の獣の権威 11-13

¹¹ また私は、別の獣が地から上って来るのを見た。それは、子羊の角に似た二本の角を持ち、竜が語るように語っていた。

「別の獣」とあります。これは、1 節にある海から出て来た一匹の獣、反キリストとは異なる、別の獣ということです。「別の」のギリシア語はアロスで、「同じ性質をもった別のもの」という意味です。獣と同じ力、位、権威を持っているということです。この言葉で思い出す約束はないでしょうか？そうです、イエスが聖霊の約束を弟子たちに与えられた時です。「ヨハネ 14:16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。」聖霊が、イエスと同じ性質を持っておられる助け主ということです。この偽預言者は、キリストに対する聖霊の働きと似たようなことを、物真似を行なうのです。

彼は、「**地から上って来る**」とあります。初めの獣が海から出てきていましたが、その海は様々な国、国語、民族などを表していました。世界における国々の興亡を、その荒波の立つ海が象徴していました。では、この地上は何を示しているのでしょうか？これは、「**天に対する地**」を表しています。天について、まず説明します。イエスがニコデモに、「**人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ 3:3)**」と言われましたね。ここは、「**上から生まれなければ**」と訳すこともできます。つまり、天によって生まれる、天につながったもの、神につながったもの、神の命にあずかった、ということでもあります。

しかし、地に属する人は、新しく生まれていない、天につながっていない、つまり、「生まれながらの人間、ただの人」なのです。イエス様が言われた偽預言者そのものです。「**マタイ 7:22-23** そ

の日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』
23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』そして、ペテロ第二やユダに偽教師の特徴が書かれています。そこにも御霊がおられないことを、指摘しています。「ユダ 19 この人たちは、分裂を引き起こす、生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません。」

そして、偽預言者は「子羊の角に似た二本の角」を持っているとあります。イエスが七つの角をもった子羊として現れておられたことを思い出してください(5:6)。角は権威や力を表していますが、キリストが神の権威と力を持っておられる方であることがわかります。ところが、二本の角を偽預言者は持っています。つまり、キリストの権威の真似事をしているのです。それで、「竜が語るように語っていた」とあります。彼は、力と権威によって語ります。イエス様が、山上の垂訓を語り終えられた時に、聞いている人たちが驚いたことを思い出してください。他の教師たちと異なり、力と権威によって語られたからです。神の権威と力があるからです、その物真似をしているのです。

¹² この獣は、最初の獣が持っていたすべての権威を、その獣の前で働かせた。また、地と地に住む者たちに、致命的な傷が治った最初の獣を拝ませた。

13 章 4 節で人々が獣を拝むのですが、そこには、この、別の獣の働きあってこそその、獣礼拝であることがわかります。初めの獣が政治的指導者である一方、この獣は宗教的指導者です。そして、「最初の獣が持っていたすべての権威を、その獣の前で働かせた」とあります。自分自身に栄光を帰すのではなく、初めの獣に人々が礼拝するように仕向けていきます。イエスが、もうひとりの助け主、御霊についての働きを次のように言われました。「ヨハネ 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。」御霊はご自身の栄光ではなく、キリストの栄光を現します。これに似せて、偽預言者は獣を拝ませるのです。

そして、「地と地に住む者」に、最初の獣を拝ませたとありますね。この後で、地に住む者たちが獣の刻印を押される場面が出て来ます。けれども、聖徒たちが殺されます。ところが、15 章に行くとして殺された者たちが天において神に賛美している姿が出て来ます。地上には住んでいませんが、天に住んだのです。それから 16 章において、獣の刻印を押されている地上に住民が、神からの激しい怒りの災いを受ける場面が出て来ます。地に属しているのか、天に属しているのか、その大きな違いです。

¹³ また、大きなしるしを行い、人々の前で火を天から地に降らせることさえた。

偽預言者が、しるしを行ないます。これはあたかも、エリヤのような働きであり、また黙示 11 章に

出て来た二人の証人のような働きであります。ですから、それも真似することができるので、人々は彼について行くようになるのです。覚えていますか、出エジプト記で、主がファラオの前で、モーセとアロンを通してしるしを与えられました。杖を蛇に変え、また戻すというようなものです。けれども、そこにファラオの魔術師が同じ事をしました。それで、ファラオの心は頑なになりました。このように神の働きを真似て、地上の人々を惑わします。

2B 獣の像礼拝 14-15

申命記に、しるしや不思議を行って、その後で神々に従うように従いなさいという者が現れても、それは、自分が主を愛しているかどうか試されているから、従ってはならないという戒めがあります(13:1-15)。まさに、偽預言者はこのことを行います。しるしや不思議を行って、獣の像を拝ませるのです。

¹⁴ また、この獣は、あの獣の前で行うことが許されたしるしによって、地に住む者たちを惑わし、剣の傷を受けながらも生き返ったあの獣の像を造るように、地に住む者たちに命じた。

しるしを行なって地上にいる人々を惑わしています。そして、「剣の傷を受けながらも生き返ったあの獣」とありますが、先ほど話したように、獣は致命的な傷を受けますが、生き返ったようになります。(ゼカ 11:17)それで、獣こそが救い主だとして、その像を造るように命じるのです。

神の国と獣の国の違いは、愛か強制かです。御国においては聖霊によって、神の愛によってキリストをあがめるようにされますが、獣の国では命じます。そして、患難期の半ばに、次のことが起こるとパウロは預言します。「2テサロニケ 2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」この、不法の人を拝む礼拝は、彼の像をそこに置くことによって実行されます。

聖書の歴史の中にこれと同じようなことが、いつも起こってきました。その典型は、ダニエル書 3章です。「3:1-2 ネブカドネツアル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に建てた。2 そして、ネブカドネツアル王は人を遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官を召集し、ネブカドネツアル王が建てた像の奉獻式に出席させることにした。」そして、その儀式においてひれ伏さなかったダニエルの三人がいて、燃える火の中に投げ込まれたという話があります。

同じダニエル書で 8章 13節には、「常供のささげ物や、あの荒らす者の背き、そして聖所と軍勢が踏みじられるという幻は、いつまでのことか。」とあります。これは、アンティオコス・エピファネスのことです。彼は、ユダヤ人を強制的にギリシア化させようとしていました。ユダヤ教のあらゆるものを憎み、それを完全に払拭して、ギリシアの宗教を拝ませようとしていました。それで、青銅の祭壇

には豚のいけにえを強要し、また神殿の敷地にゼウスの像を立てさせました。これが、荒らす者のする背きの罪でした。

そして歴史を見れば、いや今現在も、像に対して礼拝行為をさせる場面はたくさんあります。ヨハネがこの啓示を受けたローマでは、皇帝礼拝が盛んであり、皇帝の祭られた宮もありました。キリスト者はそれを拒み、迫害されました。この日本も戦時中、天皇のご真影の前で深々と礼をしなければなりません。北朝鮮はどうでしょうか？金日成の像が平壤にあり、その像に献花しないと観光さえさせてもらえません。そして旧ソ連ではスターリンの像がたくさんありましたし、人々を支配するために像を拝ませるといのは常套手段になっており、これが終わりの日には、獣の像を拝むように命じられ、全世界的に行なわれるのです。

¹⁵ それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。

像を拝ませるだけでなく、像に息を吹き込みます。これは恐ろしい事ですが、オカルトの世界の深みではあり得ることです。ペルガモンの町に、セラピス神殿というものがありません。そこには、演出がありました。その偶像が立っている台の下に祭司が中に入れ穴があります。そこから声を出して、「その像が語れる」ようにできたのです！オカルトの世界です。ティアティアにある教会でも、偽預言者のイゼベルが行なっていることが、「サタンの深み(2:24)」とされています。今は、AI技術の発達で、AIロボットの神父が信者のために祈っているのを見ることがあります。非常に不気味でしたが、像がものを言うことができるようになるのは時間の問題だと思いました。

そして、「その像を拝まない者たちをみな殺すようにした」ということです。ですから、選択肢がないということです。拝まなかったら、死ぬだけです。ですから、自分を生かすために獣を拝むことを選ぶ人々が圧倒的に多くなります。けれども、主が言われましたね、「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」ここで自分を生かす人たちは、その後、獣の国に下る災い、そして永遠の火による苦しみが待っています。けれども、ここで主の御名のゆえに殉教する人々には、天における喜びと、御国を受け継ぐ恵みにあずかります。

3B 獣の刻印 16-18

¹⁶ また獣は、すべての者に、すなわち、小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、その右の手あるいは額に刻印を受けさせた。

午前礼拝にお話ししましたように、これは、神のしるしが額に押される、神のしもべたちに対抗する刻印です。神のものとされた者たちに対して、獣のものにされていることを刻印によって押され

ます。その対象は、「小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも」とあり、無差別であり、全住民の登録です。同じようなことが、今度は逆に神の裁きの座において行われます。「20:12 死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。」とあります。福音もそうでした、信じるすべての人であり、差別がありません。悪の勢力も同じです、獣の像を拝むのを拒まないのであれば、すべての人に刻印が押されます。

日本の人たちに分かり易く話せば、まさに「踏み絵」です。すべての人が、寺に登録されます。そして、踏み絵をふめば、何の問題もありません。普通に生活できます。けれども、踏み絵を拒めば、拷問死が待っています。

^{17a} また、その刻印を持っている者以外は、だれも物を売り買いできないようにした。

これは経済的迫害です。背景は午前礼拝で説明したとおりに、皇帝礼拝であります。これが、終わりの日にどのような形であるのか、終末預言で、最も大きな関心事になっています。今の経済と今の社会です。全てデジタルでデータ化されています。クレジットカード、キャッシュカード、スイカなどのカード、そしてインターネット取引に変わってきています。ですから、その電子取引システムを誰かが掌握すれば、一気に経済活動を牛耳ることができます。さらには、そのカード情報が体内に埋め込まれるという技術まで発展していることです。マイクロチップを手の平に注射して、その中に情報が入っているという方向に動いています。

けれども大事なのは、その刻印が何なのか？ということではなく、あくまでも、自分はだれに忠誠を誓っているのか？なのです。神とキリストなのか、それとも獣なのか？ということです。私たちも、主イエスに仕えるのか、それとも他のものに仕えてもいいとしているのか？であります。

^{17b} 刻印とは、あの獣の名、またはその名を表す数字である。¹⁸ ここに、知恵が必要である。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。それは人間を表す数字であるから。その数字は六百六十六である。

知恵がいる、思慮ある者は獣の数字を数えなさいとのこと。このように命令されているのですから、私たちは獣の名を表す「六百六十六」に注目しなければいけません。しばしば、六六六と言われますが、正確には「六百六十六」です。

これは名前を表しています。ギリシア語、ヘブル語、そしてラテン語においても、それぞれのアルファベットに数字があてがわれています。これを、「ゲマトリア(gematria)」と言います。名前のアルファベットを足すと、その合計が六百六十六になるというものです。全ての名前に、ゆえに数字をあてがうことができます。

そしてこの数字には、何か意味があるでしょうか？「人間を表す」とあります。七が完全数で神を示しているならば、六は神より劣る人間を示している数字と言えます。人は神のかたちに造られましたが、「神よりいっぺん劣るもの(詩篇 8:5)」として造られました。

しかし、人は神にいくら劣るというところに留まることを拒みたくて、神に似た者ではなく、神になりたいと思います。神に劣るのですから、神との結びつき、神の支配に服従することによって、神の子として世界を支配することができるのに、神から独立したいと思うようになっているのです。こうした高ぶりが、6の数字に含まれています。

ゴリヤテがダビデに対峙した時に、彼の背の高さが六キュビト

半、また槍の穂先が六百シェケルとあります。ゴリヤテは、人間の武器によって戦おうとしていましたが、ダビデは、「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしつたイスラエルの戦陣の神、万軍の【主】の御名によって、おまえに立ち向かう。(1サムエル 17:45)」と言っています。そしてネブカドネツアルの先ほどの金の像の寸法も、「3:1 その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。」とあります。神によってその権威と力、栄華が与えられたのに、それを自分の栄光に帰そうしていたのです。そして、ソロモンの時代の富、金の重さであります。「1列王 10:14 一年間にソロモンのところに入って来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」ソロモンが初め、主に愛されて富が与えられましたが、徐々に主への愛から、その富と栄華に目が言ってしまったということです。この僅かな、神から人への栄光の転換が、反キリストの霊をよく表しているといえます。

ここが、とても巧妙ですね。悪魔は、そのまま私たちをキリストから引き離そうとしません。わず

GREEK			HEBREW		
1	A, α	Alpha (A)	1	א	Aleph (A, E) A
2	B, β	Beta (B)	2	ב	Beth (B, V) B
3	Γ, γ	Gamma (G)	3	ג	Gimel (G) G
4	Δ, δ	Delta (D)	4	ד	Daleth (D) D
5	E, ε	Epsilon (E)	5	ה	He [Heh] (E, A) H
6	Ϝ, ϝ	Digamma (V, W)	6	ו	Vau (O, U, V, W) V
7	Z, ζ	Zeta (Z)	7	ז	Zayin (Z) Z
8	H, η	Eta (Ē)	8	ח	Cheth (Ch) Ch
9	Θ, θ	Theta (Th)	9	ט	Teth (T) T
10	I, ι	Iota (I)	10	י	Yod (I, J, Y) I
20	K, κ	Kappa (K)	20	כ	Kaph (K, Kh) K
30	Λ, λ	Lambda (L)	30	ל	Lamed (L) L
40	M, μ	Mu (M)	40	מ	Mem (M) M
50	N, ν	Nu (N)	50	נ	Nun (N) N
60	Ξ, ξ	Xi (X)	60	ס	Samekh (S) S
70	O, ο	Omicron (O)	70	ע	A'ayin (A'a, O) O
80	Π, π	Pi (P)	80	פ	Pe (P, Ph) Ph
90	Ϙ, ϙ	Coph (Q)	90	צ	Tzaddi (Tz) Tz
100	P, ρ	Rho (R)	100	ק	Qoph (Q) Q
200	Σ, σ, ς	Sigma (S)	200	ר	Resh (R) R
300	T, τ	Tau (T)	300	ש	Shin (Sh, S) Sh
400	Υ, υ	Upsilon (Y, U)	400	ת	Tau (Th, T) Th
500	Φ, φ	Phi (Ph)	500	ך	Kaph-final (K, Kh) K
600	Χ, χ	Chi (Ch)	600	ם	Mem-final (M) M
700	Ψ, ψ	Psi (Ps)	700	ן	Nun-final (N) N
800	Ω, ω	Omega (Ō)	800	ף	Pe-final (P, Ph) Ph
900	Ϟ	Sanpi	900	ץ	Tzaddi-final (Tz) Tz

G. M. Kelly

かにずらした事、一線を少しずつずらしていこうとします。そして、気づいたらまるで正反対の事、あるいは中身が完全に変わってしまっているようにさせます。神中心から人中心に、少しずつ変えていくのです。

このようにして、神の国に対して、獣の国があります。我々は、どこに属しているのか？二つの名がありましたね。子羊のいのちの書に自分の名が記されているか、それとも獣の名の刻印を受けているのか？であります。私たちキリスト者は、もちろん獣の国にいません。しかし、反キリストの霊は働いています。パウロが、コリントの人たちに心配していることがありました。「Ⅱコリ 11:3 蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。」

私たちが神の子なのか、悪魔の子なのかをわかる方法について、ヨハネが第一の手紙で言いました。「3:9-10 神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。このことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。」罪を平然と犯しているのか、そうではなく、罪を犯して心を痛めて、悔い改めているかの違いです。